

## 恐怖に汚染される胎児 : Bram Stoker作品における 妊娠と出産

浅田, えり佳  
京都産業大 : 講師

<https://doi.org/10.15017/4377730>

---

出版情報 : 九大英文学. 62, pp.1-15, 2020-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# 恐怖に汚染される胎児 —Bram Stoker 作品における妊娠と出産

浅田 えり佳

## 1. はじめに

Bram Stoker は吸血鬼の代名詞となった Dracula 伯爵が登場する *Dracula*(1897)でよく知られているが、その死後、1914年に *Dracula* 出版時に刪削された箇所にあたる“Dracula’s Guest”を表題とする短編集が夫人によって出版されている。本稿はそのうち “The Squaw”および“The Secret of the Growing Gold”、そして *Dracula* における妊婦と出産についての描写を検討し、恐怖体験を経た後の出産で「生まれいずる者」は何者なのかについて考察する。

## 2. *Dracula*—Harker ジュニアは何者か—

*Dracula* の最後では、後日談として Jonathan Harker と妻の Mina は男児を授かったことが語られる。この男児は Dracula 退治に加わった仲間たちの名前を与えられているが、命と引き換えに Dracula 伯爵に致命打を与えた Quincey Morris の命日に生まれたことから、Quincey と呼ばれている。Dracula 伯爵は、他の列強諸国やユダヤ移民など、当時の大英帝国における様々な潜在的恐怖が投影された存在であることは既に丹治愛（1997）で述べられているが、男尊女卑的社会の破壊者でもある。これらだけを鑑みると、この息子の誕生はあらゆる脅威に対する大英帝国男性の（仮想的な）勝利の証のようでもある。

しかし、本当にそうなのだろうか。

Jonathan が Dracula 伯爵の古城に捕らわれたことから物語は始まるが、Dracula 伯爵の支配下に置かれた彼は、男性性が失われて精神が女性的に変化しており、貴婦人の部屋で眠り、女吸血鬼達に対して受動的な性的欲求を感じている。

I determined not to return to-night to the gloom-haunted rooms, but to sleep here, where of old ladies had sat and sung and lived sweet lives whilst their gentle breasts were sad for their menfolk away in the midst of remorseless wars. . . . I felt in my heart a wicked, burning desire that they would kiss me with those red lips. (*Dracula* 60-61)

その後、Dracula 伯爵の古城からブダペストの病院で保護された際には、決断力や尊厳といった男性らしさも失われていることが書かれている。

All the resolution has gone out of his [Jonathan's] dear eyes, and that quiet dignity which I [Mina] told you [Lucy] was in his face has vanished. (*Dracula* 122)

また、ロンドンへ帰還してからもその影響が残ったままで、Dracula 伯爵を雑踏で見かけるなり恐怖で卒倒しかけ、妻である Mina の腕にすがりつき彼女にもたれて公園のベンチで眠る始末なのである。

I [Mina] drew him [Jonathan] away quietly, and he, holding my arm, came easily. We walked a little further, and then went in and sat for a while in the Green Park. . . . After a few minutes' staring at nothing, Jonathan's eyes closed, and he went quietly into a sleep, with his head on my shoulder. (*Dracula* 183-84)

Dracula 退治が男尊女卑の秩序回復のアレゴリーであるという観点に基づくくと、確かに Dracula 伯爵が滅ぼされたことでその試みは成功しているようにも思える。しかし、注目すべきは、実際にとどめを刺したのは Jonathan ではない、という点である。吸血鬼と化した Lucy に引導を渡す際の描写と比較してみると両者には大きな違いがある。

*Arthur placed the point over the heart, and as I [Seward] looked I could*

see its dint in the white flesh. Then *he struck* with all his might. (*Dracula* 223, emphases added)

But, on the instant, came the sweep and flash of *Jonathan's great knife*. I [Mina] shrieked as I saw *it shear through the throat*; whilst at the same moment *Mr. Morris's bowie knife plunged into the heart*. (*Dracula* 367, emphases added)

「吸血鬼を完全に滅ぼす儀式」においての肝は心臓を穿つことであるのは共通しているものの、Lucy の場合は婚約者の Arthur 一人によってのみ行われている一方で、Dracula 伯爵の心臓を刺したのは Morris であり、Jonathan は心臓ではなく喉を切り裂いただけで、彼が Dracula 伯爵を滅ぼしたとは言い難いのである。そうであるならば、Dracula 伯爵から奪われた男性性を奪い返す、という Jonathan の復讐は未遂のままに終わっているのではないか。

確かに不浄な呪い (Mina の吸血鬼化) というテキストの表面上の災いは、Dracula 伯爵が死にさえすれば解けてしまうと考えてもよい。魔物を倒して呪いは解ける、お伽噺のお約束だ。しかし、ジェンダーの観点に則するならば、男性性を奪われ、妻を奪われた Jonathan にとって、敵の心臓を貫くという英雄的行為を果たすことによって自身の「男らしさ」を証明する必要がある。男に抗う墮落した女の象徴たる女吸血鬼を、生前の婚約者や最年長で父親的存在の Van Helsing が滅ぼしていることから、これらの儀式は家庭の天使であることを拒んだ女の処罰という男性権威の回復を意味していると考えられるが、その点からみても「杭打ちを誰がするのか」は非常に重要なことなのだ。権威の篡奪者を殺し、奪われたものを回復することと同義なのである。Morris による代行は、すなわち「男の力によって助けてもらう」ということであり、旧弊的な「女らしさ」が Jonathan に更に付与される結果となったのである。

このように Jonathan の男性性の復活に疑問がある以上、本当に男児は Jonathan の子供なのか、という問題が湧き上がる。もちろん Dracula 伯爵が蘇って子供の父親になったということではない。Dracula 伯爵の血や吸血鬼と化

していた Mina の影響を一切受けていない、幸福な結末の象徴であるにふさわしい純粋な人間の子供なのか、ということだ。物語の後日談はこの一連の事件を簡潔に回顧しているだけなので、Jonathan が男性性を失い、Mina が Dracula 伯爵の手の内にあった時の状態を検討する他ない。

注目すべきはやはり、Dracula の Mina 襲撃事件だろう。「はっきり覚醒した状態」で、「血を吸われるだけでなく吸わせられる」点が Lucy の場合とは大きく異なる。前者の覚醒状態での吸血については、「不貞の罪の自覚」ととらえられる。吸血行為は体液の交換、つまり性行為のメタファーであることは明白であり、そのことは Lucy への輸血の折に彼女の婚約者に対して血液提供者が罪悪感を抱く場面からもわかる。たとえそれが暴力的で強制されたものであっても、女性は不浄の烙印を押されてしまう。それは Mina がこのことによって自らを“unclean”だと嘆き、自死すら考えていることから明らかだ。この「罪の自覚」と死すら考える貞操観念が他の女吸血鬼達と異なる点だが、それ以外にも特筆すべき大きな違いがある。

“Then he [Dracula] spoke to me [Mina] mockingly, ‘. . . And you, their best beloved one, are now to me, *flesh of my flesh; blood of my blood; kin of my kin; my bountiful wine-press for a while. . .*’ with that he pulled open his shirt, and with his long sharp nails opened a vein in his breast. . . [he] *pressed my mouth to the wound, so that I must either suffocate or swallow some of the—[blood].* (Dracula 288, emphases added)

Dracula 伯爵は創世記の文言を使って Mina を Eve 即ち「妻」扱いしており、Lucy らとは違って Mina にも自らの血を吸わせている。一方的な性的搾取ではなく、相互的な関係を（強制ではあるが）築いているのである。

Jonathan と Mina はこれより前に結婚しているが、イギリス人の牧師こそ呼んだものの、場所はブダペストの病院である。後述する“The Secret of the Growing Gold”においても、イギリス以外の場所は人知の及ばない怪異の支配

する魔境の性質を持っている。<sup>1</sup>ましてや Jonathan は男性性を失い、身体も衰弱した病人であった。Mina との関係は患者と看護者であり、精神的・戸籍的には強固な絆があっても子供を生し得る正真正銘な夫婦というには達していないと言える。

Mina は襲撃された際に白い姿(夜着)であることが二度述べられるが、ヴィクトリア女王の結婚式以降、「ウェディングドレス=白いドレス」が定着していることも鑑みると、Mina は Dracula 伯爵とも重婚状態にある—あるいは中世的なトランシルヴァニアの伯爵の影響下では“droit de cuissage (初夜権)”という伝承も生きているのかもしれない。いずれにせよ、街中で肩を寄せられることさえ面映ゆく思うほど身体的な接触がほとんど描写されない Jonathan と違って、隠喩的ではあっても Mina と Dracula 伯爵との間には肉体的なつながりが存在しているのだ。さらに言えば、悪魔払いと違って処女性や純潔は不可逆の概念だ。当然、相手の男 (Dracula 伯爵) を殺したところで関係性が無かったことにはできないのだ。

Jonathan の男性性の回復に対する疑義、そして Dracula 伯爵と Mina との間の肉体的なつながり—この二つの問題点が浮き彫りになったところでやはり「子供は何者なのか」という疑問は強くなる。次章からは妊婦が登場する Stoker の短編を考察し、この問題を更に検討する。

### 3. “The Secret of the Growing Gold”—子宮を持つ館

“The Secret of the Growing Gold”(1914)は、片田舎の二つの家—貴族的な (“high above the yeoman class”, “Secret” 50) Brents 家と小地主どまりの (“never risen above yeomanry”, “Secret” 50) Delandre 家の歴史、および一族の遺伝的な

<sup>1</sup> Dracula が故国の土ごとやって来たのも、川を越えられないという吸血鬼の伝承の再現に留まらず、文明都市ロンドンに模擬的な異国をつくりだす意味もあると考えられる。

性格の紹介から始まる。Delandre 家は、かつて戦争によって富を得たものの出世することは叶わず（＝身分を上げることはできず）、近代化の影響によって衰退した一族である。そうした一族全体の経歴は彼ら特有の性質と深く結びついており、男たちは「向こう見ずで勇敢な行動」や、「教養や若者らしい気配りの欠如」のために軍での出世の途を絶たれたり職を失ったりしたことが語られている。

The latter [the Delandre] had declined generation and generation, sending out now and again some abortive shoot of unsatisfied energy in the shape of a soldier or sailor, who had worked his way to the minor grades of the services and had there stopped, cut short either from unheeding gallantry in action or from that destroying cause to men without breeding or youthful care. . . (“Secret” 50-51)

結果として、酒におぼれたり、娘が格上の家から見初められることもなく（＝身分が上昇することなく）散り散りになり、遂に Wykham と Margaret の兄妹二人を残すのみとなったのである。

それに対して Brents 家は、Delandre 家と同じように度々従軍したものの、遊興で没落する前は勇敢な功績で度々叙勲されたことが記されている。

They, too, had sent their shoots to the wars; but their positions had been different, and they had often attained honour – for without flaw they were gallant, and brave deeds were done by them before the selfish dissipation which marked them had sapped their vigour. (“Secret” 51)

ただし性格には難ありで、最後の一人となった Geoffrey もまた先祖の性質を受け継ぎ、勇敢である一方で残酷で漁色家である（“their courage, their unscrupulousness, their refinement of lust and cruelty”, “Secret” 51）。

また、この二家の住む土地の描写も興味深い。Delandre 家は所有地の Dander’s Croft に地を這う植物のようにして生きる一方（“They had . . . ‘stuck to the land,’ with the result that they had taken root in it, body and soul.”, “Secret” 50）、Brents 家の所領 Brent’s Rock は他の土地を見下ろす高所にあり（“Brent’s Rock rose up steeply from the midst of a level region and for a circuit of a hundred

miles it lay on the horizon, with its high old towers and steep roofs cutting the level edge of wood and hamlet, and far-scattered mansions.”, “Secret” 52)、上昇のイメージが強く印象付けられており、地位や身分と同様に彼らが全く違う存在であることを示している。

そんな相容れない両家の末裔二人が同棲し始め、人々は二人が結婚したのではないかと噂を始める。Wykhamはおそらく Delandre 一族の呪縛—浮上することなく地に這うようにして生きる生き方を脱そうとした Margaret を引きずり降ろそうという、いわば Delandre 一族の恩讐のような執念を燃やしたのであろう。Margaret を連れ戻すために二人に度々話をしようとするも相手にされず、恨みを募らせていく。しかし Margaret はヨーロッパの地で事故に遭い、生死不明になってしまう。(生還した Margaret によって、それは Geoffrey の仕業であったことが告げられる。) 二人の後をつけてヨーロッパへ行ったものの、ある“news”を得て事故より前に戻ってきたという Wykham の様子からは、彼の念願、つまり二人の仲を終わらせるような何かをつかんだことに疑いの余地はない。

After a few days Wykham Delandre also went away, and it was some weeks before he returned. It was noticed that he was full of some new importance – satisfaction, exaltation. . . . ‘I shall come again. My news is solid – it can wait!’ (“Secret” 54)

その後まもなく Margaret は奇禍に遭うわけだが、一年ほどで Geoffrey は新しい妻を迎えたことからして、このヨーロッパ旅行でそのイタリア人女性と恋に落ちたと推測でき、Wykham の言う“news”は新しい恋人の出現を言わんとしていたと考えられる。

なぜ二人は結婚を明らかにしなかったのか、さらに言うと正式に結婚していなかったかもしれないのか、その答えの一つは、両家が決して交わることが無いという前述した運命であるだろう。しかし、もう一つの可能性への示唆として、度会好一 (1997) の一部を引用する。

ヴィクトリア時代については、デヴィッド・トマス調査がある。



一八〇〇年以前に創立され一九〇〇年にまだ存続している貴族を選び出して、その長男と弟たちの結婚相手を追跡してみると、貴族の家に生まれた娘と結婚したのは、一八二〇—三九年生まれが二九・二%、一八四〇—五九生まれが二三・二%、一八六〇—七九年生まれは二〇・八%という数字がでた。いかにも貴族が「平民」と結婚しているようにみえるが、「平民」の中身はジェントリーを始め陸海軍将校や聖職者などジェントルマンの娘が圧倒的多数を占めていた。(中略) このように結婚による階級移動は決して不可能ではなかった。しかし、ジェントルマンと労働者階級の間は往来自由ではなかったようだ。(中略) 貴賤相婚は制度としてはなくても、心の中には存在したと言えるだろう。(48-49)

Brents 家は貴族だと明言されてはいないが農民ではなく、その所有地が体現するように他の人々とは身分の隔たりがある。土地を持っているとはいえ身分的には農民に過ぎない Delandre 家の娘との結婚は、自らの品位を貶めるといふ世俗的な考えによるものでもあるだろう。だが、Stoker の作品において、土地は人を呪縛する魔力を持つ。トランシルヴァニアで悪魔が信仰の力をものともせず跋扈するのと同様、Brent's Rock と Dander's Croft を擁するこの土地に身分やあり方を縛られている以上は、それを壊す結婚など不可能なのだ。

さて、邪魔になった Margaret を殺害(未遂)してイタリア人女性を妻に迎えた Geoffrey は、彼女の実家のホールを自分の館に完全に再現しようとする。

... and then the great body of the workmen departed, leaving only materials for the doing of the old hall when Geoffrey Brent should have returned, for he had directed that the decoration was only to be done under his own eyes. He had brought with him accurate drawings of a hall in the house of his bride's father, for he wished to reproduce for her the place to which she had been accustomed. ("Secret" 55)

正確な設計図をもとに、必ず自分の監督下で工事を行うよう命じるなど、この改装工事は Brent's Rock の中に小さなイタリア—つまり異国を創り出す試

みと言える。先ほど述べた通り、Stoker の作品において場所や異国は大きな意味を持つ。Dracula 伯爵が故国の土ごとイギリスに侵入することで、そこは不完全ながらも異国（トランシルヴァニア）の再現となってイギリス人を脅かしたのと同様に、元々土地と一族の繋がりが強調されている Brent's Rock に異国を再現したということは、元来の土地に対する冒涇であるにとどまらず、怪異の領域を身近に作り出したことと同義である。Geoffrey を襲う怪異もそこに至るまでの凶行もすべて、この再現された異国があって初めて成立するのだ。

一族や身分の呪縛により（公に）結婚することがなかった Margaret Delandre は、幽鬼のような姿になって Dander's Croft へ戻ってくるが、Geoffrey の元を訪れて返り討ちにあい、今度こそ殺害され、改装途中のホール内にある暖炉の床のひび割れに投げ込まれる。<sup>2</sup>それから後、Margaret 自慢の金髪がそのひび割れから伸び続ける…というまるで日本の怪談の典型のような怪異が起る。この Margaret が帰還時点で生きている人間であったことは、Wykham が彼女を現実の存在として認識しており（“he looked and began to realise the actuality of her presence”, “Secret” 56）、Margaret 本人も生きていることを宣言している（“I have come here to-night simply to let you [Wykham] know that I alive”, “Secret” 57）。つまり、実家へ現れた Margaret は生者であり、怪異が出現するのはやはり異国の領域内のみであると言えるのだ。

彼女が怪異として現れる暖炉の床のひび割れだが、これには殺害と死体遺棄という表面的な事象の他に、妊娠に関する象徴的な意味が隠されている。それについて論じる前に、まず、Brent 夫妻の胎児はどこへ行ってしまったのか、という問題を考える必要がある。結婚して数か月たった際に、二人の間には子供が授かったことが噂される。

And so months passed and the whisper grew that at last Brent's Rock

<sup>2</sup> 投げ込まれたことは話の中で明言されることは無いが、その後の Geoffrey の挙動や怪異から明らかである。

was to have an heir. Geoffrey was very tender to his wife, and the new bond between them seemed to soften him. . . . He seemed to have set all his hopes on the child that was coming, and as he looked deeper into the future the dark shadow that had come over his face seemed to die gradually away. ("Secret" 55-56)

しかし、いつの間にかこの子供について触れられることはなくなっているのだ。もちろん胎児に何事も起きなかつただけだとも考えられるが、怪異に見舞われて生命が危ぶまれる段になっても Brent 夫人の胎児について医師は触れられないというのは明らかに不自然であるし、Wykham の復讐も流産を示唆しているようである。

All the time Wykham Delandre nursed his revenge. . . . His vague idea was somehow centred in the wife of Brent, for he knew that he could strike him best through those he loved, and the coming time seemed to hold in its womb the opportunity for which he longed. ("Secret" 56)

このように Wykham は Brent 夫人と子供を通じて Geoffrey に対する妹の復讐を狙っており、後にその望みが達せられたという描写がある。

'What has become of my sister, your wife.' Geoffrey lashed his horses into a gallop, and the other, seeing from his white face and from his wife's collapse almost into a faint that his object was attained, rode away with a scowl and a laugh. ("Secret" 60)

これが原因で流産したとは明言されてはいないものの、前述した Wykham の復讐内容を鑑みれば、この一件が胎児を害した可能性も十分あると考えてよいだろう。

胎児の消失と正に入れ替わるように、暖炉の床から Margaret の金髪が伸び始める。炉を象徴する女神の逸話を持ち出すまでもなく、夫人の故国を再現しようとしたホールの、開口部の裂け目の中に育つ者は、妻の子宮と胎児の象徴である。火床の裂け目だけでは何の魔力も持たなかったものを、夫によりその中へ怪異の種 (Margaret の死体) が投げ込まれたことにより、消失した本物の子供の代わりに胎動を始めたのである。本当の胎児がどうなったか

明確に語られないのも、この胎児の入れ替わり・子宮を火床へ移した妊娠の継続という象徴の仕掛けを維持するために必要なことなのだ。

死んだか、もしくは死に瀕した女は怪異のしもべとなるのは、*Dracula* の女吸血鬼達も同様である。Brent 夫人もまた、恐怖のあまりに狂乱して生命の危機に瀕したことで、それまでと一転して火床の金髪が伸びるのを夫である Geoffrey と一緒に見守りたいと言い出す。(‘Come to the old hall! I know where the gold comes from! I want to see it grow!’, “Secret” 61)。

“grow”はもちろん髪が伸びることも指すが、ここでは胎児の成長というダブルミーニングでもあるだろう。

‘We want no strangers amongst us three to-night!’ she whispered with a wan smile. . . . Geoffrey looked with growing horror, and saw that during the hours that had passed the golden hair had protruded further through the broken hearth-stone. He tried to hide it by placing his feet over the broken place; . . . ‘Now do not *stir*, dear,’ she said. . . . (“Secret” 62, emphasis added)

注目すべきは、金髪の怪異を踏みつけて隠そうとしている Geoffrey の行動を「掻き回す」と表現している点だろう。このことから明らかに、狂乱した Brent 夫人は火床の中の何者かを胎児であると認識しているのである。

この恐怖の胎児が育ち切った暁に何が起こるのか。それはもちろん、怪異の元となった Margaret による Geoffrey への復讐である。Delandre 一族の特性である地を這うような生き方を体現したように、火床から伸びた Margaret の髪が床を伝い Geoffrey の足に巻き付いた状態で、Brent 夫妻は絶命したのだ。

もちろん、*Dracula* の Harker 夫妻の子供とは違って、“The Secret of the Growing Gold”における火床の中の胎児はあくまで超常現象である。しかし、この作品において、子供は平和的な大団円をもたらすものではないことが、妊娠と胎児の描写から読み取れる。

#### 4. “The Squaw”—母子の結びつきと恐怖の烙印—

“The Squaw”(1914)は母子の結びつき、子を奪われた母の執念をテーマとした短編である。ニュルンベルクへ新婚旅行に来ていた主人公夫妻は破天荒なアメリカ人旅行者 Hutcheson と意気投合し、ともに観光に出かけるが、Hutcheson のつまらない悪戯で子猫を殺してしまう。獣ながら復讐に燃える母猫を小ばかにしながら、アパッチ族の子供を殺してその母親に拷問の末に殺された混血男の話始める。最終的に彼もその混血男と同じように、「鉄の処女」に入ったところを母猫に殺されてしまう。

この作品は、先住民族をそうとは意識せずに差別する Hutcheson を中心に、彼の傲慢で暴力的な態度を親切で優しいと肯定する、名前も出てこない完全な傍観者である主人公など、人種差別にフォーカスしている。そのため妊娠や出産の描写は多くは無いが、注目したい箇所がある。

That she felt it to the quick was afterwards shown by the fact that my eldest son bears to this day a rude birthmark on his breast, which has, by family consent, been accepted as representing the Nurnberg Virgin. (“The Squaw” 45)

主人公の妻 Amelia がこの時点で妊娠していたかどうかの描写は無いものの、母親の恐怖が目に見える形となって子供に伝播していることが明言されている。また、編者の Hablethwaite も、注釈にて Stoker の *The Jewel of Seven Stars* を引用し、前世や母体の記憶や感情が人間の体に痣として現れていることを述べている (Hablethwaite 385)。

この作品では、実際の猫が牙を剥いてくるというのみで、超自然的な怪異が登場するわけではない。しかし、舞台が東の地であること、また、母猫がたとえられるアパッチ族の女の描写から、非文明的で宗教の異なる怪異の領域であることに違いは無い。そうした怪異の具現である黒猫は女吸血鬼達のように男に復讐をするのである。

この話において他に重要な点は、父子の関係性が断絶していること、あるいは夫婦間の繋がりの希薄さである。黒猫は母子であり、アパッチ族の親子

も母と子である。子を無残に殺されて母親が血眼になって復讐を遂げているにもかかわらず、父親の描写は一切ない。また、語り手である「私」も妻が、Hutcheson の無邪気かつ残酷で悪びれない所業に対して何度も止めるよう懇願しているにもかかわらず、彼女を動揺させる Hutcheson の行いを諷めるところか彼の言動を擁護し正当化することしかしていない。

‘Oh! you [Hutcheson] must be very careful. That animal would try to kill you if she were here; . . .’ He laughed out jovially. ‘Excuse me, ma’am,’ he said, ‘but I can’t help laughin’. Fancy a man that has fought grizzlies an’ Injuns bein’ careful of bein’ murdered by a cat!’ When the cat heard him laugh, her whole demeanour seemed to change. She no longer tried to jump or run up the wall, . . . ‘See!’ said I, ‘the effect of a really strong man. . . .’ (“The Squaw” 41)

Amelia がこの後の惨劇にショックを受けて失神した際は紳士的に介抱し、「私」にとって妻は弱くて守るべき対象ではあるものの、自分の一部であり自立した一個人として見ていないのは明らかで、例えば Hutcheson の人物評にしても当然妻も自分と同じ考えであると思込んでいるのだ (“Hutcheson was a kind-hearted man—my wife and I had both noticed little acts of kindness to animals as well as persons”, “The Squaw” 40)。

“The Secret of the Growing Gold”でも言えることだが、妊娠・出産において母子の関係性は密接に描写される一方で、父子の関係性は希薄である。我が子の出生に疑念を抱く父親のモチーフは Shakespeare の *Winter Tale* など様々な物語に現れ普遍性を持つものの、それが即座に Harker 家の男児が吸血鬼の子であることを示すわけではない。だが、夫よりも、妻と怪異との邂逅やその印象のほうが概して子供に深く影響していることは明白である。

## 5. 終わりに

英国や妻の命のみならず、男性の権威や女性の貞節を侵害しようとした異

国の吸血鬼が無事逃げられた後日談として、主人公夫妻に男児が生まれたことは、プロットのにも、ジェンダーの混乱を治めるという点においても、また、帝国主義的イデオロギーの肯定としても、一見して純粋なハッピーエンドと考えられる。しかし、Stoker の出産が描かれる他作品と比較したところ、それが「日常の回復」と「事件の非日常性」の対比を演出する装置として確かに機能している一方で、単純に「めでたしめでたし」を表す記号でないことも読み取れる。妊娠前であっても母親の恐怖体験は子に伝染するという考えは Stoker 作品に散見されるものであり、*Dracula* だけその影響を受けていないと言い切ることは不可能だろう。もちろん物語の幕は下りていて、Mina の息子が吸血鬼になったり、逆にジブシーの伝承中で吸血鬼を退治する Dhampir (半吸血鬼) のようになることは無い。しかしながら、*Dracula* 伯爵が現実社会の様々な恐怖の具現として描かれていることを考えると、死者の命日に生まれ、死者の名前で呼ばれるこの男児は、*Dracula* を退治した勇敢な男の生まれ変わりでもあり死者そのものでもある。幸福の象徴であるはずの子供の誕生によって、勸善懲惡の物語になぞらえて振り払った現実の脅威はまだ陰に潜み、読者たちを脅かす機会をうかがっていることを示しているのである。

#### 参考文献

- Boureau, Alain. *The Lord's First Night: The Myth of the Droit de Cuissage*. Trans. Lydia G. Cochurane. U of Chicago P, 1995.
- Craft, Christopher. "'Kiss Me with Those Red Lips': Gender and Inversion in Bram Stoker's *Dracula*." *Representation* 8 vols. Autumn. U of Chicago P, 1984. 107-33.
- Eltis, Sos. "Corruption of the Blood and Degeneration of the Race: *Dracula* and Policing the Borders of Gender." Riquelme. 450-65.
- Riquelme, John Paul, ed. *Dracula: Complete, Authoritative Text with Biographical*,

*Historical, and Cultural Contexts, Critical History, and Essays from Contemporary Critical Perspectives*. Bedford/St. Martin's, 2001.

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire*. Ed. Carolyn G. Heilbrun and Nancy K. Miller. Columbia UP, 1985.

Stoker, Bram. *Dracula*. 1897. Riquelme. 23-369.

---. "The Secret of Growing Gold." *Dracula's Guest and Other Weird Stories*. 1914. Ed. Kate Hebblethwaite. Penguin, 2006. 50-63.

---. "The Squaw." Hebblethwaite, *Dracula's Guest and Other Weird Stories* 37-49.

川本静子. 『<新しい女たち>の世紀末』. 東京：みすず書房, 1999年.

ストーカー, ブラム. 『吸血鬼ドラキュラ』平井呈一訳, 東京：東京創元社, 1971年.

——. 『ドラキュラの客』桂千穂訳, 東京：国書刊行会, 1976年.

丹治愛. 『ドラキュラの世紀末—ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究—』. 東京：東京大学出版会, 1997年.

久守和子・高田賢一・中村邦夫編著. 『英米文学にみる家族像—関係の幻想』. 京都：ミネルヴァ書房, 1997年.

細川祐子. 「ドラキュラと女たち—汚穢、そして『場』と媒体」『身体で読むファンタジ—フランケンシュタインからものけ姫まで』吉田純子編, 京都：人文書院, 2004年, 89-124 ページ.

宮地信弘. 「ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』—ホモソーシャルな男たちの性的幻想—」『Philologia』42号, 三重：三重大学英語研究会, 2009年, 155-79 ページ.

度会好一. 『ヴィクトリア朝の性と結婚—性をめぐる26の神話—』. 東京：中央公論新社, 1997年.